

第 22 回日本クリニカルパス学会学術集会  
ポスター発表

保険薬局においてパス利用により適切な FN 対応を行った 1 例

総合メディカル（株） そうごう薬局 天神中央店  
原田 素子

【はじめに】令和 3 年 8 月に制度開始となった「専門医療機関連携薬局」は、がん等の患者に対し他の医療提供施設と連携しつつ、高度な薬学管理が行える薬局であり、そうごう薬局天神中央店（以下、当薬局）も認定を受けた。特に当薬局では、患者応対時や電話フォロー時に必要な情報収集に基づく適確な判断・提案を盛り込んだ独自のパスを作成し運用している。今回は、パスを活用することで FN（発熱性好中球減少症）への適切な介入を行い、治療強度を落とすことなく乳がん術後治療を支えた事例について報告する。

【症例】40 代女性、HR (+) HER2 (-) StageⅢ乳がん術後薬物療法として EC4 コース+DTX4 コース予定の患者。EC 1 コースに FN 発症、以降 4 コースまで G-CSF 製剤が予防投与された。DTX2 コース day8 に患者からの電話相談にて発熱を聴取。MASCC スコアは低リスクであり、随伴症状なく他疾患からの発熱の可能性も低く FN と判断。パスに則り、EC 時に予備処方されていた抗生剤の服用を指示した。その後の電話フォローにて 3 日後に解熱を確認。更に次コースより、G-CSF 製剤の 2 次予防投与推奨に該当すると判断。この提案と経緯を書面で主治医に情報提供した。結果、次コースより提案が採択され、G-CSF 製剤が予防投与となった。その後 FN 再発なく 4 コースを完遂した。

【考察】今回、薬局薬剤師が患者をフォローしながらパスを活用することで、FN という重篤な副作用に対し、その場での対処から次回以降の予防に至るまで適切な提案・対応を行うことができたと考察した。

【結論】保険薬局においても専門的な薬学管理を通して、がん患者の問題点へ適切に対応・情報提供を行う事で、外来がん治療薬物療法を支えることができると考える。